

『無量寿経論』 願生偈の文献学的研究

辻本俊郎

一、序

佛教大学文学部教授香川孝雄博士を主任とする佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」班（平成七年度〜九年度、以下「香川班」）の一翼として、『往生論』（『無量寿経論』）の思想史的研究班^①が組織された。この研究会に筆者も参加する機縁を得た。ここでは、曇鸞『無量寿経論註』の解釈に頼らず、また、宗学的見地を離れて『無量寿経論』（以下、『論』とする）テキストを単独な文献として扱うという研究会ということもあって、筆者にとつては大変意義深いものとなった。

そして、筆者は佛教大学文学部岸一英教授の指導の下で、「香川班」で蒐集された『論』テキストに対する書誌学的研究に従事し、岸一英教授とともに『無量寿経論校異』（佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編、一九九九）を公にすることができた。その中で、筆者は『無量寿経論』テキスト考^②と題して、『論』テキストの字句の異同、改行箇所などを検討し、『論』テキストの系譜を明らかにした。また、これを受けて『論』テキストの字句の異同等で文意が異なるところなど興味深い箇所を検討し、拙稿〔二〇〇〇〕を発表した。

本小論はこれまでの二編を受けて、論考を進めるものであり、特に『論』の願生偈の原型を追究し、さらには紙幅の都合上拙稿〔二〇〇〇〕で触れられなかった点も補足したい。

本小論で使うテキストとその略号は次の通り。

〔東〕… 宋版・東禅寺版。

〔開〕… 宋版・開元寺版。

〔溪〕… 宋版・思溪版。

〔磧〕… 宋版・磧砂版。

〔杭〕… 元版・杭州版。

〔麗〕… 高麗再雕版。

〔雷〕… 房山雷音洞石刻本。

〔雲〕… 房山雲居寺石刻本。

〔七〕… 七寺藏本。

〔聖〕… 正倉院聖語藏本。

〔註〕… 親鸞加點本『論註』に引用される『論』。

二、『論』（願生偈）テキスト間の主要な異同について

拙稿〔二〇〇〇〕では、①題目、②第十一偈上の句、③第二十二偈、④迴向門、⑤五念門と五門、の五点につい

て検討した。ここでは、これ以外の『論』願生偈での異同があつた箇所を取り上げて検討したい。

さて、前述した『無量壽経論校異』の底本は、願生偈、長行ともにそろつており、また、その中で最も古い〔東〕を使用し、その他を校本として作成されたものである。しかしながら、それはテキスト・クリティークとして作成されたものではない。したがつて、これが『論』の原型であるとは決して言えないのである。そこで拙稿〔二〇〇〇〕及び本小論で検討する『論』の異読などに基づいて『論』に対する原型を追究したい。

当然のことながら原型というのは何種類もあるわけではなく、一種類のみ存在するのである。したがつて、入手しうるテキストの中でできる限り古いものを中心に検討されなければならない。そこで、「香川班」で蒐集されたテキストの中で、翻訳年代、またテキストの系譜から考えて〔東〕〔溪〕〔積〕〔麗〕〔註〕〔雷〕〔七〕〔聖〕の八本に絞る。

ところで、『論』原型の探る手段として、以下のような作業が必要であると考えられる。

(1) これらのテキストは原型に対して、われわれに何らかの情報を提供しているのである。テキスト間で異読がある場合、なんらかの事情で原型の読みが損なわれ、原型に改変が加えられたのではないかと考えられる。この場合、当然原型の読みを回復しなければならない。

(2) あるテキストでは意味が理解でき、他のテキストでは理解できない場合、意味が理解できる読みが原型であると考えられる。

(3) あるテキストでは意味が理解でき、他のテキストでも理解できる場合、いずれか一方が原型であり、他方が原型に改変が加えられていると考えられる。その場合、例えば、大蔵経テキストの場合、入蔵されるまでは、原典を転写して、つまり写本として伝承されるわけであるから、その時点で筆写者が誤つて書き写すことは十分に考えら

れることである。例えば、重複誤写、視線乖離などである。あるいは、筆写者が、または大蔵經の校訂者が何らかの理由⁽³⁾によつて、原文を意図的に改変することも考えられる。これらが明白な場合は、原型の読みを回復しなければならぬ。しかしながら、誤写などの発生する理由は、すべてにわたつて明らかにはならない。そこで個々の場合で、文脈などから判断せざるをえない。

(4)もし、あるテキストでは意味が理解でき、他のテキストでも理解できる場合、いずれが正しいのか判断がつかない場合、便宜上、願生偈では〔雷〕の読みに従う。なぜならば、〔雷〕は残念なことに願生偈しか刻されていないが、隋末唐初のものであるので、『論』翻訳年代(五三一年、あるいは五二九年)⁽⁴⁾からすれば、他の『論』テキストよりそれほど年代の隔たりが少ないといえる。したがつて、〔雷〕が底本的役割を果たすと思われるからである。

以上のような手順を踏んで、『論』に対する原型を追究したい。

以下に抽出する箇所は『論』に出てくる順にしたがう。また、各見出しの下に示す括弧内の数字は上段が『無量壽經論校異』(佛教学総合研究所「浄土教の総合研究所」研究班編、一九九九)の頁数と行数、下段が『大正新脩大蔵經』二六巻の頁数と行数である。

①「無礙光如来」・「無数光如来」について(五六―七、二三〇下―一六)

〔東〕をはじめとする大蔵經に入蔵された『論』、石刻本『論』は

世尊我一心 帰命盡十方 無礙光如来 願生安樂国

となつてゐるのに対して、〔七〕のみが、

世尊我一心 歸命盡十方 無数光如来 願生安樂国

となつてゐる。言うまでもなく、「無礙光如来」というのは、阿弥陀仏を指すのであるが、語義的に解釈すれば、「妨げのない光を放つ如来」である。それに対して「無数光如来」は、「無数の光を放つ如来」となる。いづれにしても文意に沿うのである。「無礙光如来」は他のテキストではその用例はないが、『無量寿経』では「無礙光仏」として見られるのであるが、「無数光如来」の用例を他に見出すことはできない。また、〔七〕の底本そのものが「無数光如来」となつてゐた可能性もあるのであるが、写本という性質上、筆写者が誤つて写すということもまた、常におこりうることである。

そして、『論』テキストの中で最も古い〔雷〕は、「無礙光如来」となつてゐる。しかも、『論』に注釈を加えた曇鸞〔註〕にも「無礙光如来」とあるところからみて、オリジナルは「無礙光如来」となつてゐたと考えられる。

② 「身觸生諸樂」・「觸者生勝樂」(五八一―、一三〇下二六)

〔東〕〔開〕〔雷〕の三本が、

寶性功德草 柔軟左右旋 身觸生諸樂 過迦旃隣陀

となつており、その他が、

寶性功德草 柔軟左右旋 觸者生勝樂 過迦旃隣陀

となつてゐる。香川班で蒐集されたテキストの中で最も成立が早いものが「身觸生諸樂」となつてゐるのである。これに訳を付すと、前者は、

宝の功德を備えた草は、柔らかくて左右に旋り、身体に触れて諸々の樂を生ずる。

〔それは〕カーチリンドカに触れる以上に〔諸々の樂を生ずるの〕である。

となり、後者は、

宝の功德を備えた草は、柔らかくて左右に旋り、触れる者に勝れた樂を生ずる。

〔それは〕カーチリンドカに触れる以上に〔勝れた樂を生ずるの〕である。

となる。「諸々の樂を生ずる」と「勝れた樂を生ずる」の相違である。どちらが原型なのか、ともに意味が通るので文脈からは判断できない。

しかし、テキストの成立年代からすれば、前者（「身觸生諸樂」）が原型ではないだろうか。

③「寶華千万種」・「寶華千万種」（五八一三、二二〇下二七）

〔七〕を除いたテキストが、「寶華千万種 弥覆池流泉」となっており、〔七〕のみが、「寶華千万種 弥覆池流泉」とある。訳を付すと、前者は、

千万種の宝の華が、池や流れや泉を覆っている。

となり、後者は、

千万種の実や華が、池や流れや泉を覆っている。

となる。ともに文意は通るが、〔七〕の底本、或いは筆写者が誤写したものと考えられる。

④「寶欄遍圍遶」・「寶蘭遍圍遶」・「寶欄遍圍繞」・「寶蘭遍圍繞」（五八一五、二二一上三）

〔東〕〔開〕〔溪〕〔磧〕〔杭〕〔聖〕の六本が「寶欄遍圍遶」であり、〔麗〕〔七〕の二本が「寶蘭遍圍繞」である。また、〔雷〕が「寶欄遍圍遶」、〔註〕が「寶蘭遍圍繞」となっている。

まず、「欄」と「蘭」との異同であるが、この句は、

宮殿諸樓閣 觀十方無礙 雜樹異光色 寶欄(蘭) 遍圍遶

の中で見られるのである。これに訳を付すと、

宮殿には諸々の樓閣があり、あらゆる方向を見渡すのに妨げるものがない。それぞれの色をした光を放つ様々な樹や宝の欄干が〔宮殿の〕周りをすべてにわたって取り囲んでいる。

となる。ここでは文脈から判断して、「欄干」(てすり、かこい)と解釈するのが自然である。とすれば、「蘭」ではなくて、「欄」が原型であろうと考えられる。

次に「遶」と「繞」の異同であるが、「遶」も「繞」ともに「ぐるりと取り巻く」という意味であるので文意に全く相違はない。すなわち、どちらでもよいわけである。実際に、一つのテキストにおいて、混同されているのである。ここでは、「雷」が「遶」となっているので「遶」を採りたい。

⑤ 「無量香普熏」・「無量香普勲」(五八―七、二三―上六)

〔雷〕〔註〕の二本が、「雨華衣莊嚴 無量香普勲」となっており、その他は、「雨華衣莊嚴 無量香普熏」となっている。ここでは文脈から見て「華や衣が雨のように降って〔安樂世界を〕莊嚴し、無量の香りが辺り一面に漂っている」と解釈すべきところである。「熏」には「匂う」という意味があるが、「勲」には、「匂う」という意味はない。したがって、「無量香普熏」が原型であると考えられる。

⑥ 「除世癡闇冥」・「除世癡冥闇」(五八―八、二三―上七)

〔雷〕のみが、「佛慧明淨日 除世癡闇冥」となっている。しかし、「闇冥」であっても、「冥闇」であっても意味の似た漢字を重ねているのであって、「仏の智慧は明るく太陽のようであって、世の人びとの無知の暗闇を除く」と解釈され、意味は変わらない。しかしながら、「雷」は長行が存在しない。

〔東〕などの宋版系統の長行でのこの偈の引用箇所を見るに「除世癡闇冥」(七〇—一、二三—二下二五)となつてゐるのであるが、高麗系統では「除世癡闇冥」となつていて混乱が見られる。

そこで、『論』以外のテキストでの用例を見るに、「闇冥」の用例は『長阿含經』中の『大本經』(大正二卷、七中)や『雜阿含經』第四十五の一八九經(大正二卷、三二六上)にも見出せるが、「冥闇」の例は見出せないのである。他の用例やテキストの成立年代から考えると、「闇冥」が原型ではないか。

⑦ 「受樂常無間」・「愛樂常無間」(五八一—一、二三—上二二)

〔聖〕(七七)の二本が「愛樂常無間」となつてゐる。すなわち、

永離身心惱 愛樂常無間

となつてゐるのである。その他は、

永離身心惱 受樂常無間

となつてゐる。その意味するところは、前者は「身心の悩みを永遠に離れ、樂を愛することが常であり、絶え間がない」となり、後者は「身心の悩みを永遠に離れ、樂を受けることが常であり、絶え間がない」となる。文脈からすれば、後者である。したがつて、原型は「受樂常無間」と考えられる。

⑧ 「故我願往生」・「是故願生彼」(六〇—一、二三—上二六)

〔註〕のみが、「是故願生彼 阿彌陀佛國(この故に、かの阿彌陀仏の国土に生まれたいと願う)」となつており、その他のテキストが「故我願往生 阿彌陀佛國(故に、私(世親)は阿彌陀仏の国土に往生したいと願う)」となり、いずれにしても文意に相違はない。したがつて、どちらが原型であるかは文脈からは判断できない。隋末唐初に刻された〔雷〕が「故我願往生」となつてゐることから考えると「故我願往生」が原型であるとするのが妥当の

ようであるが、しかしながら、実際に曇鸞は『論』翻訳年代に生きた人であつて、また、その『論』に注釈を加えたことは疑いのない史実である。これからすれば、〔註〕が原型であると考えるのが妥当である。ただ、『論註』に引用される『論』は『論』に比して字数が甚だ多く、また、内容的にも補足、整理された跡が窺えることも明白である。したがつて、現在のところ、いずれが原型であるのか判断を下せない。いずれにしても『論』の翻訳された頃にこの箇所はすでに混乱していたことだけはいえよう。

⑨ 「無量大寶王」・「無量大法王」(六〇一七、二二二上二七)

〔七〕のみが「無量大法王 微妙淨華臺(数限りない極上の法を有する〔阿弥陀仏は〕、微妙にして淨らかな蓮台におられる)」となつており、その他のテキストは「無量大寶王 微妙淨華臺(〔阿弥陀仏は〕数限りない極上の宝で飾られた、精妙にして淨らかな蓮台におられる)」とある。「無量大寶王」が原型であろう。おそらく「寶」と「法」で音が同様であるため、生じた誤写であろう。

⑩ 「恭敬遶瞻仰」・「恭敬繞瞻仰」(六〇一六、二二二上二三)

「遶」と「繞」の異同である。本小論④参照。

⑪ 「過無空過者」・「過無空過者」(六〇一七、二二二上二四)

〔東〕〔開〕の二本が、「觀佛本願力 過無空過者」となつており、その他のテキストが「觀佛本願力 過無空過者(〔阿弥陀〕仏の過去世の誓願力を觀察するに、〔それに〕出會つて空しく過ぎていく者は誰一人としていない)」となつている。「過無空過者」では理解することは不可能である。もし、強引にこれに訳を付すとすれば、「〔阿弥陀〕仏の過去世の誓願力を觀察するに、〔それに出會つて〕過ぎて空しく過ぎていく者は誰一人としていない」となる。したがつて、原型は「過無空過者」であると考えられる。

⑫ 「我願皆往生」・「我皆願往生」(六二一、二三一—中四)

〔麗〕〔雲〕〔七〕の三本が「我皆願往生 示佛法如佛(私たち皆は、(仏と法という功德の宝がない世界へ) 往生して仏のように仏法を説き示すことを願う」となっており、その他のテキストが「我願皆往生 示佛法如佛(私は、皆が(仏と法という功德の宝がない世界へ) 往生して仏のように仏法を説き示すことを願う」となっている。多少文意が相違する。すなわち、主語が一人称複数であるのか。あるいは一人称単数であるのかである。しかしながら、〔東〕〔雷〕の成立の早いものが「我願皆往生」となっていることから、おそらく「我願皆往生」が原型であると考えられる。

⑬ 「無量壽修多羅章句我以偈頌惣説竟」・「無量壽修多羅章句我以偈惣説竟」「無量壽修多羅章句我以偈頌惣説竟」(六二一—三、二三一—中七)

〔東〕〔開〕〔溪〕〔磧〕〔杭〕の五本が「無量壽修多羅章句我以偈頌惣説竟」、〔麗〕〔雲〕〔七〕の三本が「無量壽修多羅章句我以偈惣説竟」、〔註〕が「無量壽修多羅章句我以偈頌惣説竟」となっている。文意には相違はない。いずれを採ってみても、「私は、無量壽(仏に関する) 經典の章句を偈をもって総説し終わった」という意味である。〔雷〕はこの部分より以下はない。しかし、その他のテキストの中で最も成立の早い〔東〕を見るに、「無量壽修多羅章句我以偈頌惣説竟」となっているので、おそらくこれが原型であろう。

三、『無量壽経論』願生偈の原型について

以上、拙稿〔二〇〇〇〕と本小論で検討してきたことを鑑みて、『論』の願生偈の原型はおよそ次のようではな

いかと考えられる。また、当然のことながら異なる読みをいかなる理由で採用したかという根拠とともに記さなければならぬ。校異は、すでに「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）で発表されているので、ここでは、特に異読が生じたところをどの字句を採るべきか、拙稿（二〇〇〇）と本小論で検討したことに基づいて註に示した。従って、詳細な字句の異同については「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）を併せて参照されたい。

無量寿経論¹

婆藪槃豆菩薩²造 元魏天竺三藏法師菩提流支譯³

無量寿経優波提舍願生偈⁴

世尊我一心	歸命盡十方	無礙光如來 ⁵
願生安樂國	我依修多羅	真實功德相
說願偈惣持	與佛教相應 ⁶	觀彼世界相
勝過三界道	究竟如虛空	廣大無邊際
正道大慈悲	出世善根生	淨光明滿足
如鏡日月輪	備諸珍寶性	具足妙莊嚴
無垢光炎熾	明淨曜世間	寶性功德草
柔軟左右旋	身觸生諸樂 ⁷	過迦旃隣陀
寶華千萬種 ⁸	彌覆池流泉	微風動華葉

交錯光亂轉 宮殿諸樓閣 觀十方無礙

雜樹異光色 寶欄遍圍遶⁹ 無量寶交絡

羅網遍虚空 種種鈴發響 宣吐妙法音

雨華衣莊嚴 無量香普熏¹⁰ 佛慧明淨日

除世癡闇冥¹¹ 梵聲悟¹²深遠 微妙聞十方

正覺阿弥陀 法王善住持 如來淨華衆

正覺華化生 愛樂佛法味 禪三昧爲食

永離身心惱 受樂常無間¹³ 大乘善根界

等無譏嫌名 女人及根缺 二乘種不生

衆生所願樂 一切能滿足 故我願往生¹⁴

阿彌陀佛國 無量大寶王¹⁵ 微妙淨華臺

相好光一尋 色像超群生 如來微妙聲

梵響聞十方 同地水火風 虚空無分別

天人不動衆 清淨智海生 如須弥山王

勝妙無過者 天人丈夫衆 恭敬遶瞻仰¹⁶

觀佛卒願力 遇無空過者¹⁷ 能令速滿足

功德大寶海 安樂國清淨 常轉無垢輪

化佛菩薩日 如須弥住持 無垢莊嚴光

一念及一時	普照諸佛會	利益諸群生
雨天樂華衣	妙香等供養	讚佛諸功德 ¹⁸
無有分別心	何等世界無	佛法功德寶
我願皆往生 ¹⁹	示佛法如佛	我作論說偈
願見弥陀佛	普共諸衆生	往生安樂國
無量壽修多羅章句我以偈頌惣說竟 ²⁰		

註記

(1)〔東〕〔溪〕無量壽優波提舍經

〔磧〕無量壽經優波提舍

〔麗〕無量壽經優波提舍願生偈

〔雷〕優波提舍經願生偈

〔聖〕〔七〕無量壽經論

〔註〕無量壽經優婆提舍願生偈

香川班で蒐集された『論』テキストの表題は六種確認され、また、経録を見るに、いずれが論題であるのか、判断を下せない。ここでは、『論』テキストや経録に多く見られる『無量壽經論』としておく。しかし、いずれにしても、ここでいう『無量壽經』というのは、『無量壽經』という經典に対する論ではなく、『阿弥陀(無量

寿) 仏に関する經典に対する論」と解釈すべきである。この点に関しては安達俊英〔一九九九〕、拙稿〔二〇〇〇〕を参照されたい。

(2)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔麗〕 婆藪槃豆菩薩造

〔雷〕 作者名なし

〔聖〕〔七〕 波藪槃豆菩薩造

〔註〕 婆藪槃頭菩薩造

〔雷〕には作者名は見られないので、それ以外で成立が早い〔東〕に従う。

(3)〔東〕〔溪〕〔磧〕 元魏天竺三藏法師菩提留支譯

〔麗〕 元魏天竺三藏菩提留支譯

〔雷〕〔聖〕〔七〕〔註〕 訳者名なし

〔雷〕には訳者名は見られないので、〔東〕に従う。

(4)〔東〕〔溪〕〔磧〕 無量壽經優婆提舍願生偈

〔聖〕〔七〕 優婆提舍願生偈

〔麗〕〔雷〕〔註〕 副題なし

〔雷〕には副題は見られない。また、表題に「願生偈」とうたっていないテキストは、すべて副題が「無量壽經優婆提舍願生偈」とある。従って、ここでは、表題を「無量壽經論」としたので、無量壽經優婆提舍願生偈と副題を付すことにする。拙稿〔二〇〇〇〕参照。

(5)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔聖〕 無礙光如來

〔麗〕〔雷〕無碍光如來

〔七〕无数光如來

〔註〕无碍光如來

本小論①により「礙」を採る。

(6) 「我依修多羅 真實功德相 說願偈惣持 與佛教相應」は〔聖〕には見られない。写本であるので、おそらく筆

写者が視線乖離で生じた誤写であろう。

(7) 〔東〕〔雷〕身觸生諸樂

〔溪〕〔磧〕〔麗〕〔聖〕〔七〕〔註〕觸者生勝樂

本小論②により「身觸生諸樂」を採る。

(8) 〔東〕〔溪〕〔磧〕〔麗〕寶華千萬種

〔雷〕〔註〕寶華千萬種

〔聖〕寶花千萬種

〔七〕寶華千萬種

本小論③により「寶華千萬種」を採る。

(9) 〔東〕〔溪〕〔磧〕〔聖〕寶欄遍圍繞

〔麗〕〔七〕寶欄遍圍繞

〔雷〕寶蘭遍圍繞

〔註〕寶蘭遍圍繞

本小論④により「寶欄遍圍遶」を採る。

(10)〔東〕〔溪〕〔磧〕無量香普熏

〔麗〕〔聖〕〔七〕无量香普熏

〔雷〕〔註〕无量香普勲

本小論⑤により「熏」を採る。

(11)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔麗〕〔聖〕〔七〕〔註〕除世癡闇冥

〔雷〕除世癡闇

本小論⑥により「闇冥」を採る。

(12)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔雷〕〔聖〕〔七〕〔註〕梵聲悟深遠

〔麗〕梵聲語深遠

疊鶯が、「梵聲悟深遠」を引用して註を施していること、隋末唐初とされる〔雷〕が「梵聲悟深遠」となっていることにより、「悟」を採る。詳細は拙稿〔二〇〇〇〕を参照されたい。

(13)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔麗〕〔雷〕〔聖〕〔註〕受樂常無間

〔七〕受樂常無間

本小論⑦により「受」を採る。

(14)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔麗〕〔雷〕〔聖〕〔七〕故我願往生

〔註〕是故願生彼

本小論⑧により「故我願往生」を採る。

(15)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔麗〕〔雷〕〔聖〕〔註〕無量大寶王
〔七〕无量大法王

本小論⑨により「寶」を採る。

(16)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔雷〕〔註〕恭敬遶瞻仰
〔麗〕〔聖〕〔七〕恭敬繞瞻仰

本小論⑩により「遶」を採る。

(17)〔東〕過無空過者

〔溪〕〔磧〕〔麗〕〔雷〕〔聖〕〔七〕〔註〕遇無空過者

本小論⑪により「遇」を採る。

(18)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔麗〕〔雷〕〔聖〕〔七〕讚佛諸功德

〔註〕讚佛諸功德

この箇所の方行での引用などから考察して、「讚諸仏功德」を採る。詳細は拙稿〔二〇〇〇〕を参照されたい。

(19)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔雷〕〔註〕我願皆往生

〔麗〕〔聖〕〔七〕我皆願往生

本小論⑫により「願皆」を採る。

(20)〔東〕〔溪〕〔磧〕〔聖〕無量壽修多羅章句我以偈頌惣説竟

〔麗〕〔七〕無量壽修多羅章句我以偈惣説竟

〔註〕無量壽修多羅章句我以偈誦惣説竟

〔雷〕相応文なし

本小論⑬により「無量壽修多羅章句我以偈頌惣説竟」を採る。

四、終わりに

以上、本小論では、『論』の願生偈の原型を追究した。少なくとも今まで先学者によってほとんど省みられなかった字句の異同の問題点が明らかになったと思う。今後の課題としてはこの『論』長行での原型の追究である。このような文献学的研究なしには思想的に何が問題なのかも決して明らかにはならない。したがって、その上で『論』の思想的研究に従事したいと考えている。

註

- (1) 「香川班」の研究成果は以下の通り。
 - (1) 『浄土教の総合的研究』（『佛敎大学総合研究所紀要』別冊）
 - (2) 『無量壽経論校異』
 - (3) 『蔵本無量壽経異本校合表（稿本）』
- (2) およそ大きく分類すれば、次の三種になる（拙稿（一九九九））。
 - A 系統 A 1 東禅寺版、開元寺版、房山雷音洞石刻本。

A 2 思溪版。

A3 磧砂版、杭州版。

B系統 高麗再雕版、房山雲居寺石刻本。

C系統 『論註』に引用される『論』

(3) 例えば、校訂者が文あるいは単語の意味が難解、誤解を生じやすいなどと判断して、言葉を補足したり、文や単語そのものを改変する場合もありうる。

(4) 岸一英氏は、『論』翻訳年代の二説について「菩提流支の『無量寿経論』の翻訳が普泰元年(五三一)の説を取るならば、いまだ翻訳されていないことになり、翻訳もされていないものが伝受されたことになる。普泰元年(五三一)と大通年中(五二九)との整合性をもたせるための永安二年(五二九)説ではないか」とする。(岸一英(一九九九)九)

(5) 『大正蔵』十二卷、二七〇上—中。

(6) この点については拙稿(一九九九)を参照されたい。

参考文献

- 安達俊英(一九九九)・・・「浄土三部経」と『往生論』、『佛敎大学総合研究所紀要別冊 浄土敎の総合的研究』
- 岸一英(一九九九)・・・『無量寿経論』校異の意義、『無量寿経論校異』佛敎大学総合研究所
- 柴田泰(一九九六)・・・『中国仏敎における『浄土論』』の流伝と題名(一)、『印度哲学仏敎学』第十一号
- 柴田泰(一九九七)・・・『中国仏敎における『浄土論』』の流伝と題名(二)、『印度哲学仏敎学』第十二号
- 『浄土敎の総合的研究』研究班編(一九九九)・・・『無量寿経論校異』佛敎大学総合研究所

真宗勸学寮編（一九二五）…『浄土論註校異』真宗勸学寮

真宗教学研究所編（一九七二）…『浄土論註総索引』東本願寺出版部

高瀬承厳（一九一七）…『類本往生論に就きて』『仏書研究』第二九号

塚本善隆（一九三五）…『石刻山雲居寺と石刻大藏経』『東方学報』京都第五册副刊、東方文化学院京都研究所

辻本俊郎（一九九九）…『無量寿経論』テキスト考、『無量寿経論校異』佛教学会総合研究所

辻本俊郎（二〇〇〇）…『無量寿経論』テキストの検討、『佛教学会紀要』第八号

藤堂恭俊（一九九四）…『無量寿経優婆提舍願生偈（往生論）解題』『浄土宗聖典』第一卷 浄土宗